

法話に遇う

第12組 極善寺坊守 最上庸子

滋賀県彦根市より不思議なご縁により、真宗寺院に嫁いではや30数年の月日が流れようとしています。「寺の本堂を開法の道場に」という言葉によく出遇います。

最近、私が教区の坊守会や教務所の会議に出席するようになってから知った言葉であります。私が嫁いできて、毎年、本堂で報恩講がお勤まりになる時、午前、午後と法話がありますが、坊守の私は世話役の門徒と共に、お茶出し、後片付けなどで、本堂で法話に出遇うことがあまり無かったように思います。

以前にたとえ話で聞いたことがあります。寺の住職は「御院さん」と呼ばれることがあります。院とは病院の院です。寺を病気を治す病院にたとえたら、寺に住んでいる人は入院患者、門徒は時々寺に来るから通院患者、寺族の方が門徒さんより重症であると。私は寺にしながら、法話に遇う機会が無い、教えから遠い存在である重症患者でした。

今から7～8年前、第12組で推進員養成講座が開かれ、私の寺でも8名の推進員が誕生しました。住職はその推進員にくどかれ、せつかれ同朋会を結成することになり、毎月法話会が開かれるようになりました。

すると推進員の一人から、「坊守さん、お茶の用意はらんから、お話の場に座らないか」と。「住職が一番前に座らなあかん」。法話中に車を洗車していた息子にも注意して、法話を聞きなさいと言われました。何でも自分ではやれている、これでいいと思っていた私でしたが、お誘いを受け、私の背中を押してくださる人がいたから、ようやく法話の場に座れました。

もっと早く気付けばよかったのにと思った時に、住職が「長い間よそ見をしてきたけれども、法話を聞いたら今までのことは何ひとつ無駄はなく、有難いことばかりですよ」と。今、私達が出遇っているあらゆる苦しみや問題から目覚めるきっかけだと教えられました。